

有明高専 第3号 図書館報

平成9年12月1日発行
有明工業高等専門学校
図書館



目次

- 特集 図書館美術ギャラリーの誕生・・・2・3
 - 読書感想文コンクール・・・4～11
 - 入賞者・・・4 入賞作品紹介・・・5～9
 - 審査を終えて・審査委員・・・10 推薦図書・・・11
 - 全国図書館大会に参加して・・・11
 - 図書館統計・・・12～13
 - 昌子係長の赴任あいさつ・・・14
- INFORMATION・スタッフ紹介・・・15
 - 郷土の文化財・編集後記・・・16

特集 図書館美術ギャラリーの誕生

この数年、本校の図書館が利用者にもっと身近で、親しみやすい施設となるように、閲覧室、ロビー、セミナー室などの改善を図ってきましたが、図書館の玄関、ロビーおよび1階、2階の廊下がなんとも殺風景で陰鬱な印象を与えているので、より快適な図書館にするために、これらを美術ギャラリーに衣替えることにしました。幸い、大牟田美術館建設推進協議会および大牟田美術協会のご好意で多数の素晴らしい絵画を寄贈してもらえると、夢のような話もちあがり、大牟田美術協会の加治屋会長の献身的な陣頭指揮で、10月に美術ギャラリーが実現しました。全面的な改装ではありませんので不十分さはありますが寄贈展示された絵画は日本画、洋画を含めて現代の絵画の動向を伺える優れた作品ばかりで、お陰さまで、見違えるような明るく快適な、図書館にふさわしい、知的で文化的な香りを漂わせる空間に変貌しました。

今年の4月から、図書館の一般開放や土曜日開館に踏み切りましたので、地域の方々にも図書館の利用と共に絵画を鑑賞してもらえると、その意義も大きいと思います。このことをマスコミを通じて市民に広く知らせてもらうために、去る、11月1日、高専祭の初日に重ねて絵画の寄贈式とテープカットのセレモニーが上記両団体の関係者および絵画制作者の参加のもとに行われました。寄贈式では、目録の贈呈および感謝状贈呈が行われ、下記のような校長のお礼の挨拶および大牟田美術館建設推進協議会の久野会長と大牟田美術協会の加治屋会長のご挨拶が述べられました。続いて、久野会長、加治屋会長、絵画制作者代表の木村和子氏、校長、事務部長、図書館長の6名によるテープカットが行われました。

これから未永く、本校の宝物として大切に鑑賞していきたいと思います。



御礼の言葉

有明工業高等専門学校長 山藤 馨

有明高専の校長の山藤です。

本日は、皆様大変御多忙のなか、絵画贈呈式にわざわざ御出席戴き、まことに有り難うございます。

今更申し上げる迄もございませんが、かつては我が国の産業の発展に大きな力強い役割を果たして来た我が大牟田市も、市制80周年を迎えた現在、三池炭鉱の閉山に象徴されますように、産業の活気は衰退の一途をたどりつつあります。この困難な事態を打開して大牟田市の産業の振興を図り、市民生活をより豊かにして行くために、市当局を初め市民の皆様の種々の努力が行われつつあることは既にご承知の通りであります。この大牟田の地に設立され、市民の皆様と共に歩んでまいりました有明高専も今年で35周年を迎えますが、本地域における唯一の理系の高等教育研究機関として、市民の皆様と手を携えてこの困難な状況を打開すべく、去る9月から高専と学外をつなぐ窓口として地域連携推進センターを設置して、一層の努力を重ねつつあるところでございます。

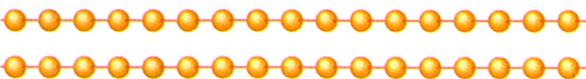
それと共に、我が大牟田市の真の振興をはかるためには、芸術の香りに満ちた文化都市を目指すことも、産業の振興に劣らず大切な事であると存じます。有明高専もこの方向に沿った努力の一環として図書館の一般開放を始めましたが、有明高専が萩尾台という高いところに位置しているという目に見える障壁以上に高専に対する市民の皆様の実効は高く、折角の努力も思った程には実効が上がりませんでした。そこで、市民に開放されている図書館に芸術性の高い絵画の市民ギャラリーを備えて、沢山の市民の皆様において戴き相乗効果で大牟田市の文化レベルの向上の一翼を担ったかどうかということになり、大牟田美術館建設推進協議会のご支援を得て、大牟田美術協会の加治屋会長をはじめ、会員の皆様方の献身的なご賛同を賜りまして、25点もの素晴らしい絵画をご寄贈戴きました次第でございます。

この間、大牟田美術協会の加治屋会長にはご多忙の身でありながら、何度も本校に足を運んでご指導戴いたり、調整に走り回られたり、大変なご努力を戴きました。

ここに皆様方の身に余るご好意に対し、心から厚く御礼申し上げますと共に、この図書館及び絵画ギャラリーが市民の皆様方の文化的な教養を高める場として、又、芸術的な憩いの場として皆様に親しまれて行くように、今後とも努力していく所存であります。

また、本高専には毎日1,000人ももの学生が登校して参ります。高専の目的は高度技術者を育てることにありますが、我が国の次世代を担う高度技術者には専門的能力の他に高い文化的教養も求められます。

今回、本校の学生や教職員がこのような素晴らしい絵画ギャラリーに毎日接することができるという幸せな環境を提供して戴きましたことは、本高専の教育の遂行にとっても願ってもないことだと存じます。ここに、有明高専の学生及び教職員を代表して、皆様に心からお礼を申し上げまして、甚だ意を尽くしませぬが、絵画寄贈式の挨拶に代えさせて戴きます。本日は、まことに有り難うございました。



祝 辞

大牟田市美術館建設推進協議会会長 久野 脩

本日、この栄え有る式典に参加させて頂き、また御挨拶をさせて頂く機会を与えて下さいました事は誠に光栄に存じ、恐縮の極みで御座います。

先般、この度の作品贈呈のお話を伺いました時、その御趣旨には心から賛同申し上げつつも私共の力不足を痛感し如何になすべきか甚だ困惑致しましたが、美術協会にこの話しをし、お願い致しましたら快くお引き受け頂き、25名の作家の皆さんも心からご賛同下さいまして作品寄贈にご協力頂き、今日の式典の運びとなり誠に有り難く思っております。俗に言う「他人の禪で相撲を取る」と言う事になりまして甚だ恐縮しつつ美術協会の方々には深く感謝申し上げます。

私事ですが四十数年前から小さな塾を開いておりますが、子供達に「人間にとって一番大事な事は頑健な身体を創る事だ、健康には一番気を付けなさい。いくら才能が有っても体が丈夫でなければ社会に貢献出来ないし健康であれば大地にしっかり起てるだろう。しかし身体だけ丈夫でも粗暴であってはならない、勉強して頭の訓練をし、知性のある人間になりなさい。今度は二本足でより安定した立ち方が出来るであろう。けれども連合赤軍の学生やオウム信徒のように頭と体だけ良くても世の為ならぬ許されざる行為をする輩が出来ては困る。良い絵画や音楽を鑑賞し、出来得ればこれを実践して美に対して感動する心、他人の喜びを喜びとし、悲しみを悲しみとする優しい人間になれば鼎のごとく最も安定した存在になれる」と事ある度に話しておりましたが、先日、十数年ぶりに東京から帰省した青年が突然尋ねて参りまして、「先生から子供の時にお聞きした三本足の話は今でも心から離れません」と言ってくれましたが、「三つ子の魂百まで」と、私の話は子供にでも理解出来るのかとつくづく感じました。

ここ有明高専はこの地域の最高学府として最新の科学をもって教育されている理工系の学校ですが、校長先生を始め、諸先生方の暖かいお心で理知的な学生生徒諸君や市民の為に情操教育の場として美的教養涵養の為にギャラリーを開設されるという事はまさしく三位一体の教育を具現されたものと尊敬申し上げ、心から敬意を表する次第です。

私どもは現在大牟田市に美術館を建設したいとの願いをこめて運動を展開しております。三池炭鉱の閉山による市財政の困窮は重々承知しておりまして、市が取り組まねばならぬ事業も多々有る事は充分認識しております。

学校教育はどんなに経済的に逼迫していても校舎、体育館、プール等々の完備した設備をおろそかに出来ません。義務教育はわずか9年間の短い期間ですが生涯学習はその9年間を含めて80年から90年間の永きに渡って市民全般に必要な大切な期間です。文化都市として持つべき最小限必要な要素として、完備した図書館、文化会館、それに美術館の三つは是非そろえたいものと考えております。

今から25年前に、美術協会20周年の時の会長として文化会館の建設を提唱しましてそれが嚆矢として現在の会館が完成しましたが、私どもが始めに念願しておりました総合的な文化会館の理想とは大きく異なり、音楽、映画、演劇等の四次元、五次元の芸術の分野が享受する立派な会館は出来ましたが、二次元、三次元の造形芸術の場はカットされて現在の姿になりました。それで5年前に美術協会40周年の時に再び会長をお受けしまして今度こそ完備した美

術館をとの願いをこめて再び建設運動を展開致しました。マタイ伝にキリストの言葉として Man shall not live by bread alone (人はパンのみにて生きるにあらず)と有りますが、当市にとっても心の教育の場としてパンのみでない美術館を是非建設したいと言う事は決して贅沢な願いでは無いと思っております。

この場をお借りして、今日お集まりの皆様方に私共の運動をご理解頂き精神的なご援助を頂きますよう切にお願い申し上げます。本日の御挨拶に代えさせて頂きます。

誠に有り難う御座いました。



祝 辞

大牟田美術協会会長 加治屋 陸

大牟田市の大自然の中の一隅、若人の学び舎、有明高専図書館ギャラリーの開設心よりおよろこび申し上げます。

さて、過日、美術館建設推進協議会から貴校への絵の寄贈の話が出されました。「廊下の壁面を張り替えて絵を飾りつけて小ギャラリーに」とお伺いし下見させて頂いた当初は、誠に失礼ながら殺風景で心もとない感じでした。しかし図書館長さんの熱意とギャラリーの構想を度々お聴きするうちに、廊下の壁面利用や、ギャラリーの姿もだんだんと見えてきました。

ここに、高専の皆様や美術館建設推進協議会の皆様方の熱意にうたれ、美術協会としてもできるだけ御期待にそえるよう努力しようということになりました。

絵は美術館で鑑賞するばかりでなく、身近な環境の中でさりげなく鑑賞できたら素晴らしいことです。貴校のユニークな図書館ギャラリーは、全国でも珍しい特異な存在になるのではないのでしょうか。展示する絵につきましては、美術協会会員の中から、中央画壇、県美術協会所属、現代絵画展大賞受賞、また、アメリカで作家活動を経てきた諸氏の参画をお願いして、現代絵画の動向が一見できる作品を陳列させて頂くことに致しました。

ここ高専ギャラリーでは、いつでも美術館なみの照明や施設の中でゆっくりと絵画芸術の鑑賞ができ誠にうれしい限りです。寄贈した者が、10年後20年後、高専図書館ギャラリーで自分の絵の前に立つことがあれば、一作者として感慨深いものがあります。

最後になりましたが貴校が今後益々地域文化発展のため、そして若人の将来のため教育に専念され、市民に愛される学校としてご活躍頂きますよう心よりお祈り申し上げます。

読書感想文コンクール

数年間途絶えていた読書感想文コンクールが一昨年から復活され、今年で3回目を迎えました。

図書館運営委員、クラス担任および審査委員の先生方の協力を得て、このコンクールを実施できました。お陰さまで、今年は3年生の国語科（非常勤）の先生および担任の先生にも一層の努力をして頂き、3年生以上の応募が大きく前進しましたので、応募総数は昨年より大きく上回り、554編が集まりました。また、応募作品の対象もさらに広がりました。次回はさらに上級生が積極的に応募してほしいものです。

担任教官による第1次審査で、まず90編が選ばれ、下記の7名の審査委員による第2次審査、第3次審査で、最優秀作1編、優秀作3編を含む入賞作品10編が選ばれました。審査講評は岩本先生に書いて頂きましたが、第3次審査に残った作品はいずれも質の高い作品ばかりで、審査をするのに大変苦しみました。入賞作は数に限りがあります

ので、やむなく選に漏れた作品も多くありました。入賞された学生はもちろん、参加したすべての学生諸君に心から拍手を送ります。感動を与えてくれてありがとう。

昨年も書きましたが、同じ本を読んでも、感動の箇所や仕方はまちまちであり、その本の主題さえ、読む人のこれまでの生活体験や読書力、創造力の違いで異なり、本の読み方、感動の仕方にはいろいろなものがあることを改めて思い知らされました。何度も読み返ししながら、活字の奥にあるものを探り、作者の作品意図に迫る読書ができれば幸せだと思います。

感想文を書くことは、本を読む力に加えて、いかにそれを文章として表現するかという、書く力も必要になります。このようなコンクールに何度も参加することによって、感受性、想像力、思考力、文章構成力を培ってほしいと思います。

（図書館長 新谷肇一）

入賞者

■最優秀賞

1年 建築学科 木庭 綾 「野火」

■優秀賞

1年 物質工学科 梅原 幸 「風立ちぬ」

1年 建築学科 大橋 景子 「地獄変」を読んで

3年 建築学科 松村めぐみ 「こころ」を読み終えて

■佳作

1年 機械工学科 浦崎 文香 「地獄変」を読んで

1年 物質工学科 大津奈緒子 「あしながおじさん」を読んで

1年 建築学科 前田 圭子 「こころ」

2年 電気工学科 古賀 剛 「高瀬舟」

2年 電子情報工学科 平川 理江 「やさしさの精神病理」を読んで

2年 建築学科 曾我部寛子 「コンプレックスとプライド」

入賞作品



「野火」

1年 建築学科
木庭 綾

戦争とは何だろうか。戦争で勝れば国は豊かになるのだろうか。また、人が死ぬという事はどういう事だろう。戦争に参加して死ぬのは確かに「国の為」かもしれない。しかし、だからといって人の命をそう簡単に奪ってよいのだろうか。自分が生き延びる為に、他の人間を殺さなければならぬ戦争というものはこの世にあってはならないと思う。

この『野火』という小説は、その様な戦争の中で、敗走する軍隊から離れる事を強制された一兵士が人肉嗜食にかかわって神についての考えを高めてゆくという話である。人肉嗜食とはつまり、人間の肉を食べる事だ。主人公は他の兵士に猿の肉だと言って食べさせられたのだが、本当にそんな事があったのだろうか。食べる物がなければ殺してまでもその肉を食べなければならなかったのだろうか。

私は戦争に行った事がない。だからその恐ろしさを知らない。人は皆、自分の命が大切なのだ。＃自分は死んでいいから絶対に人殺しはしない＃などは、平和な国の平和な時代に育った人が言う言葉だと思う。実際に、爆弾で

手足をもぎ取られた人、内臓が飛び出している人などを見たなら、きっと他人の命など、どうでもよくなってしまいに違いないのだ。あるいは、気が狂ってしまうかもしれない。主人公も人を殺した。最後まで自分の意志で人肉を食べる事はしなかった。彼が野火を見つけると必ずそこに人間を探しに行ったのは、彼の心の中でどこか、人肉を食べたいという思いがあったからなのだろう。それに耐えたというのは、神によって本当の意味で救われたと言えるのだろうか、天使になれるのだろうか。そして、神とは何なのか。沢山の疑問の中でもこれを一番考えさせられた。神は存在するのか。存在しないのであれば、主人公をいつも見つめていたあの眼は、誰なのだろう。彼は気が狂っていたのだろうか。私はそれは、彼が神を信じるあまりに、彼の心が作りだしたものだろうと思う。戦争の最中、次々と仲間が殺されていく中、神でも信じなければやっていられなかったのかもしれないし、純粋に神を信じていたのかもかもしれない。

私は彼が死の予感、自然、神への接近に応じて、彼自身をしだいに純粋化していった様な気がした。全ては戦争中の事だ。何が起ころうとも仕方がないと言ったらそれまでだが、もっと私達も戦争について知る必要があると思う。今は平和な日本だが、いつかは争いに巻き込まれるかもしれないのだ。私はそのような事は絶対あってほしくない。痛いのは嫌だ。死にたくない。人を傷つけたくもない。戦争というのは人を悲しませるだけだ。

もしも神が存在するのであれば、どうか世界を平和にしてほしい。



「風立ちぬ」

1年 物質工学科
梅原 幸

結核に病んだ婚約者と主人公の、サナトリウムでの日々の生活の、これといってドラマのない物語を、どうして私は、あんなに息づまるような思いで読めたのでしょうか。

主人公の「私」も、節子も常に死と隣合わせの生活で、お互いをいたわりあって日々を送っているのが、ありありと伝わってきました。いずれ来るだろう死を予感しながら、それを決して口には出さず、まるでふたり芝居のように思えました。

春から夏、秋、冬へと時間が風のように流れるなか、死をみつめての愛情生活は続きます。どちらかが呼吸をはずしたら、その隙間から死がのぞいてしまう真っ暗な死のかけの谷に落ちてしまいそうな中で、無力そうなふたりの生はかえって鮮やかに見えました。死という運命に絶望しながらも、力の限りを尽くして生きようとする姿は、私の中に印象深く残っています。

この物語は死をモチーフにしてあります。でもなぜか、暗いとか淋しいとか弱いとか思うことはありませんでした。それはふたりの目がいつも、生と、生きるということのほうに向けられているからだだと思います。死というものを受けとめ、それを超えて生きようとする事は簡単にできるようなことではありません。でも、お互いを信頼し合い、愛し合っていたからこそ、ふたりにはそれができたのだらうと思います。

二人の気持ちもむなしなく、節子は死というものにさからえなかったけれど、本当に精一杯、生きたのだから、何も思い残すことはないと思います。そして、ふたりのサナトリウムで過ごした日々は決して無駄ではなかったはずで

す。たった一冊の本、たった一つの物語から、私はたくさんのお話を学び、刺激を受けました。毎日をただ何となく生きていく私にとって、忘れられない物語となりました。生きるということは、やらせではないのです。誰かにやらされてるのではなく、自らの意志で生きようとしなければ、生きる意味がないと思います。誰もがいずれ必ず迎えなければならない死というもの、また生きるということの意味、死と向かい合って生きようとする事の大切さ、「風立ちぬ」はこれらのことを私に気づかせてくれた一冊でした。



「地獄変」を 読んで

1年 建築学科
大橋 景子

『地獄変』の中の良秀の生き方に、私は憧れを感じた。何と凄い人間なのだろうと思った。今、「凄い」と一言に言ったが、この言葉には幾つかの意味がある。辞書で調べてみれば、「凄い」という言葉の意味は次のように載っている。一、恐ろしい。気味がわるい。二、甚だしい。三、甚だしくすぐれている。良秀の場合、どれを使うかなど考える必要はない。良秀は全ての意味を用いた上で、凄い人間なのだ。普通では考えつかないような残忍なことを平然として行う良秀。確かに、非常だとは思いますが、それは自分の志した道を究めるためのこと。そこまで、一つのことに夢中になれば、そのためなら犠牲を払ってもいいと思えることを、私は、素晴らしいと思ひ、うらやましいと感じる。

牛車に乗っているのが実の娘だということに気づいたが、止めに行くことができなかった良秀。実の娘が、猛火の中黒髪を乱しながらもだえ苦しんでいるのを見た良秀は、どう感じたのだろうか。実の娘を殺してしまうようなことをしてしまった自分自身に対して、何か感じることはあったのか。ここまでを読んだ私は、前にも書いたように、やはり良秀は恐ろしく非情な人間だ、と思った。実の子供が、

猛火の中焼け苦しんでいるのを見て、泣きもせず、喚きもせず、ただ呆然と立っているだけの親がどこにいるものか、と思った。しかし、最後まで読むと、私の気持ちは変わった。今まで冷たい人間だ、と思っていた良秀という人間の中に、子供に対する愛情が見えたような気がしたのだ。自殺ということの中に、娘に対する愛情を抱く良秀を感じたのだ。もし、本当に心の底から冷酷な人なら、最後に自殺などしなかったと思う。実の娘を自分のせいで死なせてしまったという想い。焼け死んでいくのを目の前にして、助けに行くことができなかったという想い。そんな、娘に対する想いがあったからこそ、後を追うようになり自殺をしたのではないだろうか。作者である芥川龍之介も、私と同じように、良秀に憧れた一人であったのではないかと思う。作品を書いていくうちに、良秀の生き方、考え方に魅せられ、それで、最後まで非情な人間のままで終わらせたくないと思ひ、自殺をした、ということと終わらせたいのではないだろうか。

人には、それぞれの生き方がある。良秀のような自分の才能に生きる人生。平凡な幸せの中で、静かに生きていく人生。この世の中に、良秀のような人がどのくらいいるだろう。私は良秀の生き方に憧れる。良秀の才能に憧れる。心に憧れる。私は私の道で、良秀の人生と戦っていきたい。その心の戦いの中で私の道を究めていけるはずだ。そしていつの日か、自分の才能に自信を持てるようなそんな人に、私はなりたい。



「ころ」を読み 終えて

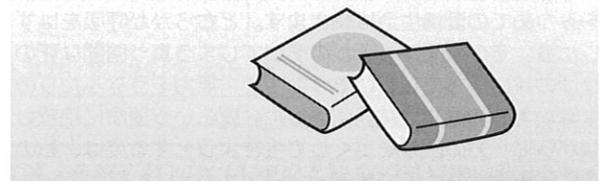
3年 建築学科
松村 めぐみ

私は『ころ』を読み進めていくうちに、どうしても感情的にならざるを得なかった。「先生」が死を選んだことに私は、なぜと何度も心の中で繰り返した。自殺では何も解決できないし、大切にして守らねばならぬ妻を残しておくことは妻を裏切ることになるはずだ。今さら死んでも「K」は喜ばないだろう。心とは裏腹に友を傷付け、また自分自身、生涯に渡り苦しんだ。「先生」は逃げたのか。自殺で償うつもりだったのか——。死んでしまいたいと思う程の経験をしたことのない私は、「私なら」と幾度となく反論し、激しい憤りを感じた。「先生」の考えを理解できなかった。

しかし、それぞれの人物について冷静に考えてみると、「先生」を批判するとともに尊敬する気持ちが生まれた。「先生」は自分に対して誠実だから自殺したのだと考えるようになった。きっと「K」の死には死をもって償うことしかできなかったのだろう。たとえ「K」が自分の弱さから死んだとしても、「先生」は自分を責めた。真つ向から勝負を挑み「お嬢さん」を取り合なかつたこと、陰でこっそり掠めたことを悔んだ。

私は自殺を肯定するつもりはない。が「先生」は苦しみから逃れるためだけに自殺したとは思わない。確かにたとえどんなに苦しくてもその苦しみを最後まで飲み乾すことが償いと言うものかもしれない。私は、「先生」は妻を愛し、「K」の死には自らの死で償いたいからこそ自殺を決意したのだと思う。もし周りを見るのができない人なら、妻と心中しただろう。妻には妻の人生があることを知っているから残していったのではないか。最後まで自分を許すことなく、絶えず責め続けた「先生」。自分に厳しく、冷静に自分を見つめることのできるそんな「先生」に気付いた時、私は尊敬の念を抱かずにはいられなかった。そして若かった頃の「先生」のように、自分可愛さから常に甘えの存在する私が恥ずかしくなった。

私はこの本から、誰もが持つ人間の醜さを学んだ。





「地獄変」を 読んで

1年 機械工学科
浦崎文香

私は時々、過去のことを振り返り、自分の「浅ましさ」に嫌気がさす。「浅ましい」とは、「品性が下劣であり、一緒にいるのが嫌な感じで、嘆かわしい行動」を指すらしい。全く耳が痛い限りだ。機嫌が悪ければ、人にあたってしまう。自分の調子が良くない時には、調子良く物事を片づけていく人を妬ましく思ってしまう。我ながら情けない。いつも自分に、何事にも動じない包容力があれば、と思っている。もちろんそれは、自分で身につけるものなのだろうけれども。

『地獄変』では随分と主人公の一人、良秀の気味の悪い様子が描かれている。浅ましいと言えるまでの良秀の画家としての執念。気味が悪いと感じるのは多分、彼の執念の凄まじさに押されるからなのだろう。それを私は浅ましいと感じたのかもしれない。

だが、それは良秀だけだったのだろうか。私は良秀の気味の悪さに隠れた、ある人の狡猾さが気に掛かった。

掘川の大殿。良秀に屏風を描くように命じ、良秀の娘を仕えさせていた男。どうして娘を焼いたのか、それは書かれていない。夜中に娘を襲ったのが、この人だとは限らない。しかし、良秀が牛車と女を燃やして欲しいと頼みに行ったのは確かだが、娘を燃やすように命じたのが大殿な

ら、描けと命じたのも大殿なのだ。彼の狙いは良秀親子への報復ではなかったのか。表面上は良秀の望み通りに。しかし裏では報復を。自分の手は汚さない、狡猾なやり方を、浅ましいと思った。

『地獄変』には、二面の浅ましさが描かれている。どちらをより浅ましいと感じるかは、その人次第だろう。私には良秀の画家としての執念よりも大殿の狡猾さの方が余程浅ましく感じられた。良秀の執念には一種の憧れの的なものを感じずにはいられない。無論、良秀のように、何を犠牲にしても絵のためならと言える者になりたい訳ではない。周りをきっぱりと捨て、何かをするのに憧れる訳ではないのだ。自分が本当に一生懸命になれるもの、それを見つけ、選んでいったことにこそ、憧れを感じる。中学そして高専と未来を考え、不安になることは数多い。少なくとも希望のうちの一つを選んで高専に来たわけだが。後ろを振り向かず、自分に向いた仕事を選ぶのは大変難しいと思う。選んだ時点で、きっと何かを切り捨ててしまっただろうから。

大殿をより浅ましく思うのは、その行動を自分が理解してしまうからだろう。そういう自分に嫌気がさし、それはそのまま、大殿への嫌悪の上に付加される。「許し難い自分」を大殿の中に見るからなおさらその行動は、浅ましく感じられるのだ。こういう人物にはならず、包容力のある人物になりたいものだ。だがそうなるには、どれ程の年月と努力が必要なのだろう。その時私は何歳になっているのか、それを考えると気が遠くなる。



「あしながおじさん」 を読んで

1年 物質工学科
大津奈緒子

私はこの本を読み終えて初めて「魅了される」という感覚を覚えました。この本の主人公であるジュディは極めて個性が強く、感情豊かな女性で私の心を引きつけたのでした。

嬉しかった事や悲しかった事、彼女の感じたすべての感情や一日一日の小さな出来事から大きな出来事まで、全て手紙という文字だけの伝達法であまりに巧みに、又、繊細に表すものだから目をつぶってみればそこにジュディが楽しそうに友達と会話をしていたり、農場で小説を書いていた、時には泣いたり・・・と、私の中に実在する人物かのように浮かび上がって来るのでした。

私はジュディが大好きです。とても努力家で、少しいたずら好きで、たまにかんしゃくを起こしてあしながおじさんに八つ当たりしたりもするけれど、とにかく夢にまっしぐらに進んで行こうという姿勢には尊敬すら覚えました。きっとジュディの青い目は大変澄んでいて一点の曇りもな

かったんだと思います。私はそんな彼女に同じ女性として強い憧れを抱きました。きっと私だけじゃありません。この本を読んだ人ならみんな彼女をいろんな面でうらやましく思うでしょう。彼女自身は長い間孤児院に18年間もいたことを引け目を感じていました。しかしそれは間違っていると思います。人間というのはどこで生まれても、どこで育っても最も大切なのはその人の人間性だと思うのです。実際ジュディはすばらしい人間です。どこの誰にも引けはとりません。あしながおじさんだって、お金がないからとか両親がいないからとか安っぽい同情ではなく彼女の人間性、将来性を見抜いていたからこそ多大な資金を毎月与えていたのだと思います。

私は毎日毎日何の変化もなく同じパターンで一日を過ごしていました。しかしジュディにとっての一日一日は沢山の事が数えきれぬ程あって手紙の5、6枚じゃ書き上げきれない程です。その私とジュディの違いは小さな出来事をよく観察し、それについていろいろな思考を巡らせるかそうではないかの違いだと思いました。

この本が私に与えてくれた影響はとても大きなものでした。私はこれから先、ジュディの様な女性になりたいと思います。

いつも体の内側から輝きを見せる女性に。



「こころ」

1年 建築学科
前田 圭子

「もっと早く死ぬべきだったのに何故今まで生きていたのだろうか」という言葉は、自殺した「先生」の友人「K」の遺書の最後に記されていたものだ。その友人「K」が自殺するに至った理由が自分にある事を、何十年の間誰にも語らず苦しみ続けた「先生」は、全てを「私」に手紙という形で残した。そして自らも命を絶つ時、同じ事を考えたに違いなかった。

漱石といえば『坊ちゃん』『吾輩は猫である』などの明るい雰囲気のある作品しか読んでいなかった私は、この本の奥に隠された重くて苦しい内容を知らずに読み始めた。そしてその途中、軽い気持ちで読んだ事をひどく後悔することになったのだ。

まず、自分も突如として悪人になるものなのだという事を私は心に押しつけられた。それは人間の全ての生活において実は常識的な、当たり前的事なのかもしれない。しかし、それは人間として決して認めたくない事で、どんな偉人でも自分自身の存在を否定する様なその事実と直面して生きる事は、凄く苦しいに違いない。

しかし、「先生」は自分が善人だと思っていた叔父に欺かれた時点でその事実を認め、自殺するまでにそれを心に

留めて人を疑い続けたのだ。そして、苦しみを人に打ち明ける事なく「私」に全てを記した長い手紙を残して一人で死んでいってしまう。その事実はあまりにも重く、またそうやって心の中にそんな重い苦しみを背負って生きる事は、きっと死ぬよりも辛い事なのだろう。そしてそれを「先生」からただ一人、手紙という形で打ち明けられた「私」は、心を重く閉ざした「先生」から信頼された唯一の人間だったのだ。

「先生」がそうしたように、人間はどんなに悲惨な事実を知り尽くしても、人を信頼しなければ生きていけないという面があるのだろう。それは人間の心の矛盾であり、また弱さでもあり、強さでもあるのだと思う。そして漱石はそのようなものを全て見据えてこの『こころ』を書いたのかもしれない。そして私はむしろ、そんな人間の矛盾した部分を信じたいと思う。たとえそれが、自分の心の弱さだとしても。

『こころ』が教えてくれるものは全て重く辛いものだが、今私が感じる自分の偽った笑みや人間への不信感などを「先生」のように全て受け止めていきたいと思った。そして、「私の鼓動が停まった時、あなたの胸に新しい命が宿る事が出来るなら満足です。」と先生が言ったように、世の中の暗いものをまっすぐに見詰め、そしてそれをしっかりと自分の中に抱き寄せる事ができたとき、人の命の源となる新しい生きようとする力が私たちの命に宿るのだろう。そう信じてこれからの人生を生きていきたい。そんな願いを胸に私は『こころ』を閉じ、ゆっくりと心を開いた。



「高瀬舟」

2年 電気工学科
古賀 剛

「人の悪を人によって決めることなどできない。」この本を読み終えて、そう感じた。私達の身の回りにある、善と悪。しかし、それらは本当に善で本当に悪なのだろうか。

私にはどうしても喜助が悪人であるとは思えないのである。喜助は弟を楽にさせてあげたいが為に死なせたのだ。弟はどうせ助からない病気だった。人殺しには違いないが、はたしてそれは悪なのだろうか。

そこには、病気に苦しむ当事者と第三者の死に対する概念の違いが関係していると思う。当事者における死とは、自らの苦しみとの闘いである。だが、当事者の家族が非常に貧しい生活を送っていたらどうだろう。当事者には家族に迷惑をかけまいとする心苦しい気持ちが加わってくるだろう。喜助の弟のようにだ。しかし、第三者にとっては、人の死は単に悲しいもので長生きこそが人間の悦楽であると考えものだ。従って、喜助のように弟の命を絶つなどという行為は、第三者から見れば許されざる行為であり、社会的な制裁を加える必要があるのだ。

社会的制裁。だが、社会的と言っても、よくよく考えてみると、裁いているのは力を持った人間、恵まれた人間で

ある。恵まれた立場から、過ちを犯してしまった人間を、正義や道徳に反すると言って裁くのである。しかし、裁く人間は、喜助の心の痛みを思いやりの判断を下したわけではない。社会の秩序に反すると言ひ、遠島を言い渡したのである。

これは江戸時代の話であるが、現代社会においても同様な傾向があると思う。近代国家は法治国家。国家の司法・行政などの業務に携わっている人間が力を持っている。しかし、私は法曹界・官界で最近モラルが低下していることを指摘する。厚生省では殺人、大蔵省では窃盗、その他にも詐欺や破壊活動を行っている。それにもかかわらず、自分の都合のいいように事実をねじ曲げ、役立つ仕事を行っていると言ひ張り、私達が納めた税金で大きな顔をして暮らしている。たとえルールが誤った方向へ進んだとしても、社会ではそれがルールとなってしまう。反対はするだろう。しかし、「オオトリテ工」の前では、人間が一番に考えるのは、保身なのである。戦時は国のために死ぬ事は善とされ、裏切るとは悪とされた。結局、善悪などというものには「オオトリテ工」によって制御されているのである。

今、脳死を人の死とみなしてよいか否かの議論が繰り広げられている。しかし、結局は「オオトリテ工」の思うように事は運ぶであろう。そして、喜助が無罪となるような時代が来るかもしれない。だが、善悪を判断するのは自分でなければならぬ。そのためにも、社会に対して深い洞察力を持ち続けなければならない。そうしないと、再び「オオトリテ工」によって戦争の惨劇を繰り返さないとも限らないのだから。



「やさしさの精神病理」を読んで

2年 電子情報工学科
平川 理江

「『やさしさ』って何だろう。」

以前から折に触れて浮かんでいた疑問が、この本を読んだ後に、また頭に浮かんだ。

この『やさしさの精神病理』という本は、精神科医である著者が診療した〈患者〉達の病例をまとめたエッセイ集である。エッセイというものがあまり好きではない私が何の抵抗もなく読めたのは、テーマとなっている「やさしさ」というものが、日常の生活に深く関わっており、実際自分でもそういう事について考えたことがあるからであろう。

文中でも述べられているが、世に言う「やさしさ」は大きく二つに分けられる。対人関係において、相手の気持ちをよく知り、同調し合えるような「やさしさ」と、相手の心に深く立ち入らず、ただ相手を傷つけないようにする「やさしさ」である。前者の「やさしさ」は、いわゆる学園闘争時代に流行った考え方であり、気持ちをはっきりと言葉に表して互いを思いやる「やさしさ」である。それに対して後者のそれは、他人の「プライバシー」には決して立ち入らない事を前提としている。互いに傷つけないように、慎重に言葉を選び、上っ面だけの付き合いしかしない

「やさしさ」である。

このように「やさしさ」の観念が変わっていったのは、ひとえに時代の変遷が背景にあるのだろう。時代が変わり、人も変わる。それらを創る社会も変わる。それによって考え方も変わる。何事にも「ホット」になっていた以前とは違い、現在は「クール」、いや「ウォーム」、つまり「ぬるま湯」の状態にあると言われる。様々な「モノ」に囲まれ、恵まれた環境にありながらどこか物足りない。熱中できるものがない。自分が何をしたいのかわからない。ぬるま湯につかっているかの如くうだうだとし、煮え切らない。そういった中途半端な状態が中途半端な「やさしさ」を生むのである。

著者は、現代の「やさしい」人々は、「本当の自分」を探すべきだと説いている。海外留学や旅行、カルチャーセンターに通うことでも、方法は自分に合ったもの、興味を引かれたものでいい、まず、「本当の自分」を探すことだ。その先は詳しく書かれてはいなかったが、私はこう思う。「本当の自分」を見つけた後、心に余裕ができた頃、本当の「やさしさ」というものが自ずと見えて来るのではないかと。「本当の自分」探しに熱中するうちに、他人に対する「やさしさ」が、それを表すべき時にどうすればよいかという事が、自然とわかってくるのではないかと。優柔不断な「やさしい」人があふれ返っている今、「本当の自分」探しは大変重要な事なのではないだろうか。しかし著者は、ある人の話を用いて、こう締め括っている。

「自分探してもいいが、探し始めるときりがないから、ほどほどにしなさい——。」



「コンプレックスとプライド」

2年 建築学科
曽我部 寛子

コンプレックスはあるが、それを他人に悟られたくはない。そんな内供の思いは、私を含め、誰にでも共通することだと思う。四六時中そのことで悩み、どうにかして隠せないか、少しはマシに見えないかと頭をひねる。でもどうにも変わらないとわかったと、自分は追い込まれるだけになり、守ろうとしていたプライドも逆に傷付けられる。内供の場合もそれを何度も繰り返して、ついに鼻をゆでてみるようになったが、このときも弟子に素直に頼まないところが、また別のプライドのせいなのだろう。しかし、弟子に鼻を踏んでもらっているときに、不服そうな顔をしているというのが不思議だった。なくなって欲しいほどの憎々しい鼻なのに、それが物品として扱われるのはまた嫌だという。内供にとっての鼻はどういうものか、よくわからなくなった。

しかし、鼻が短くなくても笑われることに変わりはない。私は人間というものが愚かで仕方がないと思った。大

きすぎる鼻に自分自身が振り回されている人や、それを見て笑い、どんなにその人が苦しんでいるのかわかろうともしない人間がいる。そんな小さなことにこだわってしまうのが、愚かなところであり、でも人間らしいところでもあると思う。

また、人間は他人の不幸に同調するけれど、その人が不幸を脱け出すと、もう一度同じ目に合わせてみたくなる、というのがあった。とても残酷で他人がそう思っていることを知ったら軽蔑するかも知れない。でもよく考えると、自分の中にもそんな感情があるような気がして、(いやきっとあるのだろうが、)ドキリとした。確かに、何より幸せになりたいのは自分だし、他人が幸せだとそれを妬む。そんな人間の利己的な部分を暴かれると、恥ずかしくなりました。

みんなのそんな気持ちを察知して、内供が怒り出したのも無理はない。でもそんな思いをしたのも、結局は、元の鼻に戻る事が一番良いのだと気付いたためだと思う。すがすがしい気持ちで、顔を上げて、大きな長い鼻をぶら下げて歩くのが、内供にとっての最高のプライドだろう。しかもそのプライドは、笑われまいとして鼻を隠していた小さなプライドより、ずっと大きくて立派なものだ。

きっと内供は、もう一度笑われるだろう。でも鼻のことで他人に笑われるのは、それが最後になると思う。

審査を終えて

平成7年度から始まった読書感想文コンクールも、第3回目の実施となり、今年も10編の入賞作品が決定しました。選考委員の一人として、選考の経緯と所感を述べたいと思います。

まず、選考委員として、一般科より4名、専門学科より2名、新谷図書館長の合計7名が選出され、委員会で推薦図書50冊が決定されました。推薦図書の中から1作品を選び、原稿用紙3枚以内という規定のもとに募集したところ、554編の作品が集まりました。第一次審査はクラス担任の先生に行き、90編の通過作品について、選考委員で分担をして2次審査を行いました。この段階で32編が残りました。この32編を、学年、氏名等を全て伏せた上、選考委員全員で、相対評価により1作品について5点満点の得点をつけました。その結果、合計得点の高い順から、最優秀賞1名、優秀賞3名、佳作6名の計10名の作品の入賞が決まりました。

入賞した作品から、最優秀賞と優秀賞に輝いた4作品について述べてみましょう。

最優秀賞1A木庭綾さんの「『野火』」は、戦争文学という難しい作品を、若い澄んだ目を通して全力でとらえているのが印象的です。主人公の問題を自分のうえに置き換えながら、人間存在の重みについて深く掘り下げており、木庭さんの熱意が言葉のひとつひとつから伝わってくる力作です。3A松村めぐみさんの「『こころ』を読み終えて」は、登場人物の「死」の意味を深く考え、人間の複雑な心の内部に切り込んだ作品です。それによって「先生」の生き方を肯定する視野が開けています。1C梅原幸さんの作品「『風立ちぬ』」は、感動が、瑞々しい素直な文章で綴られています。一冊の本をとおして、自分の日常を真摯に見つめる姿が浮かんできました。最後に1A大橋景子さんの「『地獄変』を読んで」についてですが、大橋さんは、

主人公「良秀」の心に踏み込んで、「良秀」の生き方について、真正面から向き合っています。切れ味の良い、力強い文章が、説得力を感じさせます。

私達は、読書によって自分以外の人の人生に触れることができます。そして感覚や体験をとおして、その人生と向き合い、さまざまな問題を見つめ直すのです。感想文を書くということは、そんな自分自身を再確認する作業でもあります。入賞作品は、文章によって自分を表現する意欲が伝わってくる作品ばかりでした。また、選外の作品にも、推敲すれば良い作品になると感じさせるものが幾つもありました。

ただ今年も、高学年の応募が3年生までに比べて極端に少なく、残念に思いました。読書をとおして心を豊かにし、表現することによって自己を深めるということは、学生時代にとっても大切なことです。来年度は、全校学生による感想文コンクールになることを期待しています。

(一般科 岩本 晃代)



審査委員	一般科目	国語 (運営委員)	焼山廣志
		国語	岩本晃代
		歴史	高田実
		ドイツ語	瀬戸洋
	専門科目	機械工学科 (運営委員)	猿渡真一
		電気工学科 (運営委員)	辻一夫
		建築学科 (図書館長)	新谷肇一

平成9年度 読書感想文コンクール推薦図書 (50冊の本)

	著者名	書名	出版社名等		著者名	書名	出版社名等
1	夏目漱石	こころ	文庫	27	チャールズ・ディケンズ	クリスマス・キャロル	文庫
2	夏目漱石	草枕	文庫	28	アンドレ・ジイド	狭き門	文庫
3	森 嶋 外	高瀬舟	文庫	29	シェイクスピア	ロメオとジュリエット	文庫
4	武者小路実篤	友情	文庫	30	ヘルマン・ヘッセ	車輪の下	文庫
5	伊藤左千夫	野菊の墓	文庫	31	ジョン・ウェブスター	あしながおじさん	文庫
6	芥川龍之介	鼻	文庫	32	アンネ・フランク	アンネの日記	文庫
7	芥川龍之介	地獄変	文庫	33	ジョージ・オーウェル	動物農場	文庫
8	川端康成	伊豆の踊り子	文庫	34	マーク・トウェイン	ハックルベリー・フィンの冒険	岩波文庫
9	梶井基次郎	檸檬	文庫	35	シャミッソー	影をなくした男	岩波文庫
10	太宰 治	斜陽	文庫	36	ド ー デ ー	風車小屋だより	岩波文庫
11	大岡昇平	野火	文庫	37	モ ー ム	月と六ペンス	岩波文庫
12	遠藤周作	沈黙	文庫	38	トルストイ	イワンのぼか	岩波文庫
13	有島武郎	生まれ出づる悩み	文庫	39	ラーゲルレーフ	キリスト伝説集	岩波文庫
14	井伏鱒二	黒い雨	文庫	40	魯 迅	阿Q正伝	岩波文庫
15	井上 靖	あすなろ物語	文庫	41	ネビル・シュート	渚にて：人類最後の日	創元推理文庫
16	井上 靖	天平の壺	文庫	42	中川 雅子	見知らぬわが町	葦書房
17	島崎藤村	破戒	文庫	43	大平 健	やさしさの精神病理	岩波新書
18	竹山道雄	ビルマの豎琴	文庫	44	辺見 庸	もの食う人々	共同通信社
19	高野悦子	二十歳の原点	文庫	45	井 深 大	わが友 本田宗一郎	ごま書房、 文春文庫
20	高樹のぶ子	光抱く友よ	文庫	46	ファラデー	ロウソクの科学	文庫
21	三島由紀夫	潮騒	文庫	47	柳田 邦夫	恐怖の2時間18分	文春文庫
22	幸田 文	流れる	文庫	48	小山重朗	よみがえれ黄金の島 ：ミカンコミバエ根絶の記録	筑摩書房
23	有吉佐和子	華岡青洲の妻	文庫	49	吉田 洋一	霧の発見	岩波新書
24	堀 辰 雄	風立ちぬ	文庫	50	西岡 常一	木のいのち木のこころ	草思社
25	山田 詠美	晩年の子供	文庫				
26	中 勘 助	銀の匙	文庫				

全国図書館大会に参加して

去る10月29日から31日まで山梨県甲府市において、全国図書館大会が開催され、参加してきました。この大会は毎年開催地をかえて行われるもので、今年で83回になります。全部で14の分科会に分かれて、それぞれ事例発表やパネルディスカッションが行われました。私は短大、高専図書館関係者の集まりである第4分科会に参加しました。

高専関係の事例発表は6件あり、その内4件が図書館の電算化・情報化に関する事例でした。業務の電算化による効率化や情報化による利用者サービスの向上が、多くの高専図書館において、重点的な課題として取り組まれている

図書館係長 昌子 喜信

ことがわかります。その中で東京高専の事例は、4つの学内施設（図書館、電算機室、AV室、LL教室）を統合して、マルチメディア教育センターを設立した経緯と概要についてであり、興味深いものでした。将来の高専図書館の一つのモデルを示すものとして注目されます。

今回の大会には全国から30の高専が参加され、他高専の人たちと交流を深めることができたのは大きな成果でした。この機会を与えて下さった関係各位にこの場を借りてお礼申し上げます。

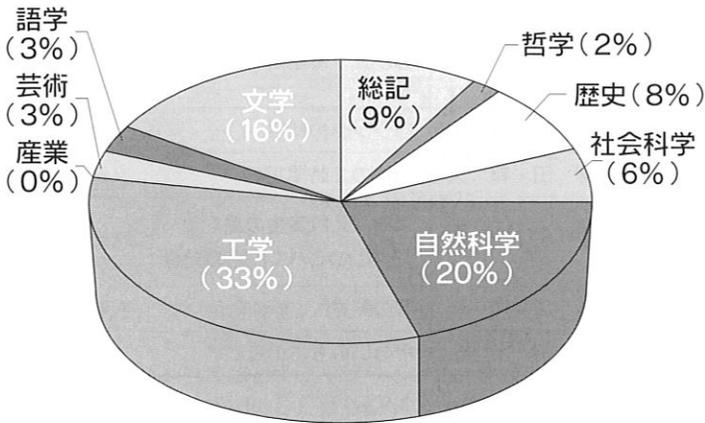
123456780123456780123456780123456780123456780123456780123456780
 123456780
 123456780
図書館統計
 123456780
 123456780123456780123456780123456780123456780123456780123456780

1. 蔵書統計 (平成9年3月31日現在)

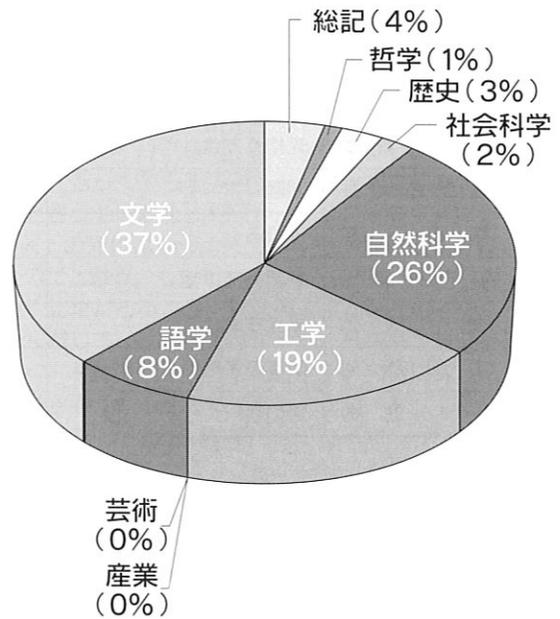
蔵書構成

分類		000	100	200	300	400	500	600	700	800	900	合計
		総記	哲学	歴史	社会科学	自然科学	工学	産業	芸術	語学	文学	
図書 の 冊 数	和	5,298	1,530	4,973	3,835	12,284	20,082	272	1,936	1,715	10,048	61,973
	洋	266	48	199	134	1,855	1,356	3	28	551	2,772	7,212
	計	5,564	1,578	5,172	3,969	14,139	21,438	275	1,964	2,266	12,820	69,185
雑誌の 種類数	和	16	2	3	7	20	74	0	14	4	12	152
	洋	3	1	9	1	2	31	0	0	3	2	52
	計	19	3	12	8	22	105	0	14	7	14	204

分類別蔵書割合「和書」



分類別蔵書割合「洋書」



2. 平成8年度利用状況

開館日数 244日



月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計
入館者数	2,179	3,264	3,100	2,847	3,028	2,137	2,679	2,535	2,438	2,393	3,257	1,508	31,365
貸出冊数	522	1,023	670	701	187	467	640	753	465	603	562	166	6,759

夜間(17時~20時)の入館者数および貸出冊数の占める割合は、それぞれ14%(4,492人)、28%(1,865冊)ある。

3. 5年間利用統計

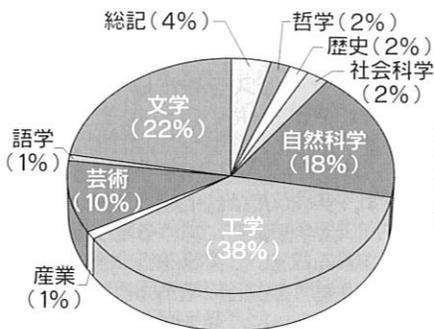
分類別貸出状況

年度	総記	哲学	歴史	社会	自然	工学	産業	芸術	語学	文学	合計
平成4年度	140	11	27	30	607	908	0	260	23	263	2,269
平成5年度	160	51	50	33	763	1,599	2	312	24	530	3,524
平成6年度	143	60	49	47	706	1,979	8	390	50	815	4,247
平成7年度	197	118	195	128	851	2,289	15	696	86	1,668	6,243
平成8年度	215	125	235	264	1,141	1,992	100	530	57	1,720	6,379
平均	171	73	111	100	814	1,753	25	438	48	999	4,532

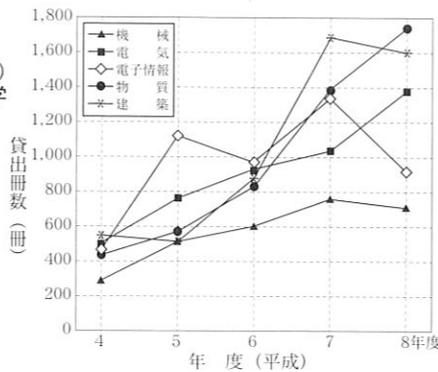
利用状況

年度	学生数	開館日数	入館者数 総計	一日当り 入館者数	帯出冊数 総計	一日当り 帯出冊数	一人当り 帯出冊数
平成4年度	991	286	7,191	25	2,269	8	2
平成5年度	1,018	245	9,715	40	3,524	14	3
平成6年度	1,015	238	34,987	147	4,247	18	4
平成7年度	1,037	240	36,692	152	6,243	26	6
平成8年度	1,039	244	31,365	128	6,379	26	6

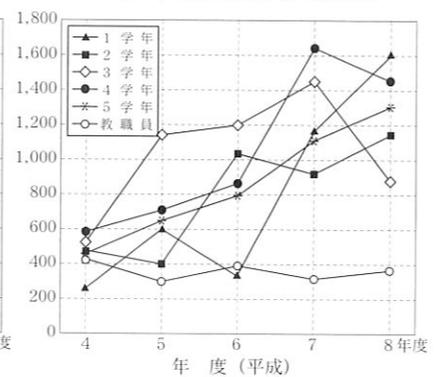
分類別貸出冊数割合
(平成4~8年度平均)



学科別図書貸出冊数

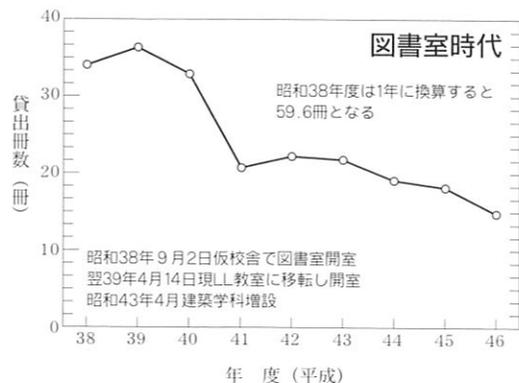


学年別図書貸出冊数

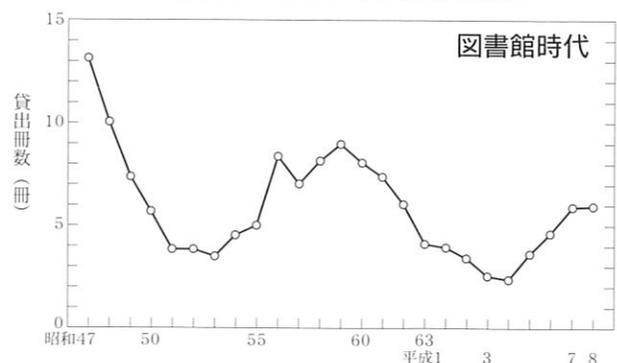


4. 創設時からの一人当り貸出冊数の推移

学生一人当り年間貸出冊数



学生一人当り年間貸出冊数





着任のご挨拶

図書係長 昌子 喜信

4月に着任してから7ヶ月が経ちました。大規模大学の図書館から高専の図書館に赴任し、その違いに最初はすこしとまどったのですが、今では高専図書館はどういうものか少しずつ見えてきたように思います。この機会を利用して、思いつくままに今考えていることなどを述べ、挨拶に代えさせていただきます。

高専図書館のよさはなにか

～ 小さいことはいいことだ ～

高専に来るまでの私の高専に対する認識は、はなはだ貧弱なもので、「学年が5学年ある高等学校」程度にしか思っていました。また、高専の図書館は、高校の図書館と短大の図書館が一緒になったようなものだろうとも思っていました。高専に勤務しはじめて半年以上が経った今、まだまだ認識不足の点があると思いますが、高専は高度な専門知識と技術を教授するとともに研究活動を推進する教育・研究機関であると考えます。そしてこのような工学・技術系の教育・研究機関である高専において、その図書館はどのような役割を果たさなければならないのかというと、基本的には大学図書館と同じ機能を果たすべきだと考えます。非常に大ざっぱな分け方ですが、学生の学習を支援する「学習図書館」としての機能と、教官の研究を支援する「研究図書館」としての機能です。

さて、大学図書館と比較して、高専図書館の違うところは、何と言っても規模が小さいという点です。「規模が小さいから資料が少ない」とか「小規模図書館は予算が少なく何もできない」というようなことばで語られるように、「小さい」ということばには、一般にマイナスイメージがつきまっています。確かに大規模図書館は、小規模図書館よりも多くの蔵書を持ち、新しい分野（例えば電子図書館関連）に対する予算も優先的に配分されます。しかし、小さい故のメリットというものがあるようにも思われます。

まず、学生と教職員あわせて約1,200人という数は、一人一人顔を覚えることも不可能な数ではありません。一般市民に開放しているとは言え、主な利用者は学生と教職員ですので約1,200人という限られた範囲の図書館利用者に対してきめ細かなサービスが提供できる可能性があるということです。

第2に、資料や蔵書の管理のしやすさがあると思います。図書館にとって、蔵書冊数が少ないということは自慢になる話ではありませんが、蔵書冊数が少なければ整理もしやすくなります。蔵書のすみずみまでがきれいに並べられ、いつでも利用しやすくなっているということは図書館を利用しやすくなる上で大切なことです。また、蔵書の中のどの部分が弱いとか、どの部分が古くなっているとかが把握しやすくなり、弱い部分を補充したり、古くなっている部分を入れ替えたりすることで、蔵書の新陳代謝をよくすることができます。図書館の蔵書は一旦作り上げてしまえばおしまいというものではなく、生き物と同じで新陳代謝をよくしてやる必要があります。蔵書のデータベースを作成するのに、冊数が少なればデータの品質を高めやすい、ということも重要な点です。

高専図書館のよさについて、「小さい」ことのメリットを2点あげましたが、メリットを最大限に生かしながら、デメリットを克服する努力が大切だと思います。

高専図書館の問題はなにか

それでは、デメリットあるいは問題点はどのようなものでしょうか。高専図書館の法令上の位置付けとか、高専図書館の館長の法令上の明文化などが、国立高等専門学校協会などで問題になっているようですが、ここでは、有明高専に即して「小さい」ことのデメリットに起因する問題点で、気のついた点を4点あげてみます。

まず第1は、図書購入費の少なさに起因する資料整備の立ち遅れです。特にビデオなどのAV資料や、CD-ROMなどの電子化された資料がほとんど整備されていません。また、参考図書や二次資料なども古くて使用に耐えないものが目につきます。

第2に、学生への資料利用指導や文献探索指導などがなされていない点です。これは、先にあげた参考図書や二次資料の整備の立ち遅れによるものと思われる。

第3に、電算化・情報化の立ち遅れです。平成3年に業務用システムが導入され、閲覧室の蔵書のデータベース化を行い、貸出・返却業務と館内の専用端末での検索サービスを提供してきましたが、このシステムは図書館だけの閉じたシステムであるため、LANに接続して蔵書データベースを研究室や学外に提供するなどの拡張性に欠けます。

第4に、教官へのサービスの立ち遅れです。多分に情報化の立ち遅れとも関連していますが、外部の機関が提供する二次情報データベースの代行検索サービスなど教官に対するサービスが非常に遅れていると思います。

有明高専図書館でやってみたいこと

～ きめ細かなサービスをめざして ～

私が有明高専の図書館でやってみたいことは、先に述べた問題点を少しでも改善すること、ということになりますがその中でも特に次の点をあげたいと思います。まず、電算化・情報化の推進です。少しかたい話になりますが、平成8年に学術審議会が、「大学図書館における電子図書館の機能の充実・強化について」という建議を行いました。これを受ける形で、大規模大学を中心に電子図書館関連の予算が配分されるようになりました。電子図書館化をリードする大規模大学から、やがては中小規模の大学、そして高専へと電子図書館化の波は広がってくるでしょう。電子図書館化の波、あるいはもっとくだけてインターネットに代表されるネットワークの発達は、高専図書館にとってはある意味で朗報といえると思います。それは、ネットワークにつながることによって、高専図書館はもはや、丘の上の孤立した小さな図書館ではなくなるからです。蔵書冊数や資料購入費の少なさという「小さい」ことのデメリットは、ネットワークでつながった他の図書館の蔵書でカバーすることができます。このようなネットワークの発達、あるいはさらに進んで電子図書館化の果実を進んで享受できるようにすることがこれからの高専図書館には必要になってくると思います。

もう一つは、利用者に対するサービスの充実です。学生のみなさんに対しては文献探索指導などの利用指導、教官の先生方に対してはレファレンス業務や代行検索サービスを進めていきたいと思っています。

「小さい」ことのメリットを最大限に生かし、きめ細かなサービスをめざして微力ながら頑張りますのでどうぞよろしく願います。



図書館からのINFORMATION

一般開放および土曜開館を始めました

4月から図書館を一般開放をして、市民の皆さんも利用できるようになりました。また、土曜日午前10時から午後4時まで開館しています。

貸出方式が変更になりました

9月から貸出時のブックカードへの記入がなくなり、手続きが簡単になりました。大いに利用してください。返却期限までに読み終えなかった人は、必ず延長手続きをしてください。期限を超過して借りている本があると、新たに貸出を受けることができません。

ILLサービス(NACSIS-ILL)を開始しました

今まで郵便で行っていた学外への文献複写依頼を、9月から学術情報センターILLシステム(NACSIS-ILL)を使って行っています。申し込んでから文献が到着するまでの期間が大幅に短縮されています。文献複写の申込はE-mailで受け付けていますので、お気軽にお申し込み下さい。(申込先E-mailアドレス: lib-ill@ruby.or.ariake-nct.ac.jp)
※学外への文献複写依頼は教官のみ受け付けます。

電子図書館サービス(NACSIS-ELS)の申込を受け付けています

学術情報センターの電子図書館サービス(NACSIS-ELS)が4月から開始されました。国内の29の学協会が発行する62種の雑誌の表紙を含めた全ページが集録され、画面表示や印刷ができます。対象となる雑誌は今後さらに拡充される予定です。今年度に限り無料でサービスされていますので、まだ利用登録されていない方は図書係までお申し込み下さい。来年度からの利用条件については、詳細が分かり次第お知らせします。

スタッフ紹介

●平成9年度 図書館運営委員

委員長 新谷 肇一(図書館長)
運営委員 田口 紘一(教務主事)
" 猿渡 真一(機械工学科)
" 辻 一夫(電気工学科)
" 森 紳太郎(電子情報工学科)
" 三浦 博史(物質工学科)
" 山下 俊雄(建築学科)
" 焼山 廣志(一般科目(文))
" 荒木 真(一般科目(理))
" 倉狩不二男(庶務課長)

●図書館倶楽部編集委員

顧問教官 焼山 廣志(一般科目)
編集委員長 長尾 一也(機械工学科2年)
委員 西田 智美(物質工学科2年)
" 橋本 玲(物質工学科2年)
" 近藤 洋平(電気工学科1年)
" 前田 圭子(建築学科1年)

●事務部

庶務課長 倉狩不二男
図書係長 昌子 喜信
司 書 宮本美沙子
" 戸上 清子

●夜間・土曜開館職員

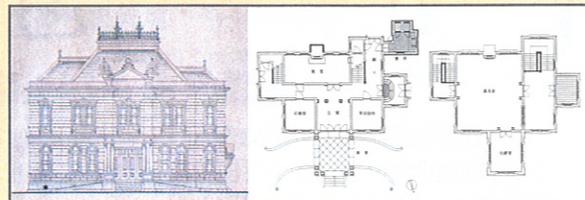
平山 智子
西原 佐知
橋口 悟
森野 誠
林 豊洋

郷土の文化財 旧立花家住宅(御花)洋館

明治45年 柳川市新外町



正面



正面図(設計図)

1階平面図

2階平面図

「御花」として親しまれている旧立花家住宅が建つ場所には元禄10年(1697)に設けられた立花家の別邸がありました。別邸が構えられて今年にはちょうど300年になりますが、その別邸について詳しいことが解っていません。現在の建物は明治45年に完成した和洋館並立住宅の一部です。工事は明治39年頃に計画され、明治41年には開始されました。洋館の工事には明治42年に取り掛かっています。

御花には多数の設計図が残されています。洋館の図面の中に「B・N」のサインがあり、中島文吉だと推定されます。従来設計者として指摘されている亀田共次郎の名前は、和館の図面の中に「亀田」と押印されているもので確認できます。

木造2階建・建築面積180㎡の洋館は建物全体の1割にも満たない規模で、接客と全体の玄関としての機能を主としてしていました。日常の生活は和館で行われていました。外壁はドイツ式下見板張で石造風に見せ、左右対称の堂々としたファサードを示しています。内部での一番の見所は2階大広間の「謁見室」です。マントルピース・天井・入口



謁見室

に立つトスカナ式円柱等、西洋建築の様式が見事に用いられています。ここでは舞踏会が開かれていたそうです。

その他、玄関ポーチの双子柱の石造円柱、玄関ホールのイオニア式円柱と中高の3連アーチ、階段の親柱や手摺子等、装飾は豊富です。

筑後地方に残る明治の洋館は少なく、当建築はその中で唯一の本格的西洋建築です。立花伯爵家だからこそ建設したのでしょう。和館については別の機会に紹介します。

(建築学科 松岡 高弘)

編集後記

図書館と学生、教職員を結ぶ図書館情報誌、「有明高専図書館報」の第3号をお届けします。学生編集委員(顧問: 焼山教官)によって精力的に発行されている「図書館倶楽部」とともに、活用していただくと幸いです。この第3号も創刊号、第2号の編集方針を基本的に踏襲して作りました。メインは昨年同様、読書感想文コンクール入賞作品の掲載です。応募作品554編の中からみごとに入選された優秀作品10編を一挙掲載しました。じっくり読んで、今後の励みにして頂きたい。

第3号は図書館の美術ギャラリーの誕生を特集としました。図書館のロビー、廊下を改装して美術ギャラリーにしたいと考えていたところ、幸運にも大牟田美術館建設推進協議会および大牟田美術協会と画家のご好意で多数の素晴らしい絵画を寄贈して頂き、一挙にこの構想が実現しました。11月1日の高専祭初日に重ねて絵画の寄贈式が行われましたが、その時のご挨拶やテープカットの様様を紹介しました。画家の皆様のご恩を忘れず、いつまでも本校の宝として大切に鑑賞していきたいと思えます。

今年3月に永年、図書館で活躍された宮川係長が定年退職されました。本当に長い間ご苦労さまでした。4月に、その後任として九州大学の図書館から昌子係長が赴任されました。早速、赴任のご挨拶と今後の抱負を語っていただきました。大規模図書館で培ってこられたその力量を大いに本校で発揮してもらいたいと期待しています。全国の高専にLANが設置され、コンピュータを用いた図書管理や電子情報ネットワークによる情報提供が可能になり、教育、研究における図書館の果たす役割が格段に大きくなってきている今日、他高専に比べて、1歩も2歩も遅れをとっている実情を早く克服して、全国の高専、大学と肩を並べるところに立ちたいものである。

先日、山梨県の甲府市で行われた第83回全国図書館大会に、昌子係長が参加されました。全国の学校図書館、地域図書館の関係者が集まり、互いに情報交換をする有益な会議ですが、その時の様様を簡単に報告してもらいました。シリーズの郷土の文化財では、建築学科の松岡先生に柳川の「御花」について書いて頂きました。